慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史的研究と修史學(三)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.3 (1930. 9) ,p.95(451)- 113(469)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史的研究と修史學（三）

第三節

あらゆる藝術は表現と形式の二要素を有してゐるものである。藝術家の目的は單にその蘊蓄を他人に傳ふるだけのものではなく、他人をして自己と同じ氣分感情を起さしむるにある。藝術品は經驗に對する直接の反應（例へば肉體的苦痛に依る叫びの如きもの）ではなく、又只單なる事實の記載でもない。實に、藝術品を生ずる衝動は、經驗の記憶に依て喚起されたる情緒である。藝術の特徴である此の創作行爲は、藝術家の心裏に經驗が存續し、而してそれが反省に依て再現された場合に初めて起るものである。「戰爭の當日に於ては、質問に依て赤裸々なる眞理を蒐集し得るが、その翌朝となればその眞理は或る一定の制服をまとふに至るのである」。藝術品は經驗の描寫ではなくて、印象を通じて見たる經驗の描寫である。藝術品は個人的の希望又は恐怖の告白ではなく、藝術家に對する直接の關係をはなれたかくの如き情緒の表現である。藝術家の目的は、笛や太鼓の音色の模倣ではなくして、或る場合に於て笛又は太鼓を聞いて呼び起された氣分情緒であると感ぜられたものゝ再現である。その如何なる結果を生ずるかはプリスカス（Priscus）の記事に依て說明されるであろう。

「夕べとなるや炬火は點ぜられ、二人の蠻人はアッチラ（Attila）の前に進み出で、その作になる歌謠を歌ひ、アッチラの勝利と、その戰時に於ける勇敢なる行爲とを說いた。宴に列せる人々は此の二人の蠻人を凝視し、戰爭の記憶の腦裏に呼び起さるゝと共に、或者はその詩に魅惑され、或者は精神的興奮を感じた。

或は、すでに老境に入り、その好戰的熱誠を實地に施す術もない爲に、思はず涙にむせぶ者もあつた。」(1)

形式は、印象を適當に他に傳ふるにあたつて、集中關聯等の必要より起つた制限である。情緒は普及する時その力を失ひ、注意は思想の變化に依て散漫となる可きものであるから、藝術品の第一の要素は「統一」にある。藝術的創造は一の「行爲」の活氣ある再現又は認識である。藝術家が表現するが爲に事實を「取捨選擇」することの當否を論ずることは、その題目の選擇及びその取扱ひ方の調和等に關する問題と同じく、藝術品が批評家の論爭の問題となる時初めて生ずるものである。「美」の問題は、藝術品がその聽者又は觀客に及ぼす影響に關するものであるから、從屬的の問題である。「美」は藝術家の目的ではない。藝術家がその題目を他人に傳ふるにあたつて、聽者又は觀客に滿足の感じを與へたる場合に即ち生ずるものである。かく見る時はあらゆる藝術は或る意味に於て、「オポチニスト」であると言ひ得る。即ちその價値は聽者又は觀客に好印象を與ふるや否やに依て定められ

るものであるからである。

さて修史學は、既に述べた如く、如何に異常なる事件を記述するかを論ずるものである。即ち高尚なる意味に於て重大であると感じらるゝ事件、及び個々の人間の盛衰よりも一層有力なる表現の形式をとるべき事件の記述である。他方に於て、歷史の表現の强弱深淺は之を讀む人々の範圍に依て制限さるゝものである。何となれば、何れの國何れの時代を問はず、如何なる男女もソホクレスやシックスピヤの戲曲について美的感情を懷くけれども、歷史は一時代、一民族の男女に對して記述さるゝに過ぎないのである。故にヒルン(Hirn)は「修史術は隣邦民族に對して國威を保ち武力を示す事の出來た國民の場合、或はその國民內に於て互に相對抗してゐる豪族が覇權を爭奪した場合に於て、最高程度の發達に達したのである。」(2)と言つてゐる。又カア(Ker)は次の如く述べてゐる。「古代獨逸の英雄詩の大部分は、その題目に就て言ひば、第四世紀から第六世紀に亙る上古の獨逸史上に於ける最も多事の時代に溯り得ることを知る

のである。」(3) ベルナドット・ペラン(Bernadotte Perrin)は歴史に就て次の如く述べてゐる。「之を概括的に論ずれば、實際大歴史家が世に出た時代は常に壯大なる戰爭の後である。――例へばトロイ戰爭、ペルシャ戰役、ペロポンネスス戰後、スパルタとテーベとの爭鬪、ギリシャ人のアジヤ征服等が之である。」(4)

ルキヤヌスは「歴史記述の方法」と題する彼の論文の序文に於て、皮肉なる言葉を以て次の如く言つてゐる。「さて類似せる事件を擧げて言ひば、我が教養ある階級の多數の人々は、今や、アブデラ(Abdera)熱にかゝつてゐる。……目下の國難多事――即ち蠻人の入寇、アルメニヤ人の敗北、幾多の勝利等――が相次で起り始めてより、いやしくも教育ある者は何れも歴史をあらはさんとするのである。否、到る所にツキヂデスありヘロドトスありクセノフォンあり。古來の格言は眞理ならざるを得ない。實に戰爭は萬物の父である。見よ無數の歴史家は一擧にして此世に生れ出でた。」(5)

之と同樣に、第十五世紀に於て、「對佛戰爭の初めに當つて勝利を得たことが刺激となつて、」英國に於て、「初めて國民的歴史文學の最初の果實を產するに至つたのである。」(6) 尙かゝる實例を擧れば限りないが、第十九世紀に於けるヨーロッパの修史學が戰爭より生れ出でた事は、一般によく知られてゐる所である。

更に此の問題を深く研究すれば、修史學は要するに、その結果に照らして戰爭の記事を傳へんとするものであることが明瞭となるであろう。事件と同時にその瞬間に記されたる記錄が、もし存在したならば、それは歴史家にとつて最も有益な材料であろう。然し其記錄其者を以て修史學の產物とは認められないのである。イアン・ハミルトン卿(Sir Ian Hamilton)は事實と記述との關係を明白に述べてゐる。

彼は次の如く言つてゐる。「若しも戰爭の巷より直ちに事實を蒐集して、早急に之を公にする時には、公平な記事又は充分なる記事を供給する事は望れない。然るに之に反して、一度び戰爭の勝敗が決してしまつた後に於ては、從軍將士の常として、その武功を話すにあたり、國民的又は聯隊的虛榮感を滿足せしむる樣な陳述をなす傾向がある。故に歴史家が非常な苦心を以てその仕事に着手せんとするも、すでに時期が後れてゐる感がある。歴史家は司令官の與へた命令、及びそれに依て起つた軍隊の

運動を記錄する。かくて彼は巧妙なる理論を構成することが出來るけれども、この命令を下した際の司令官の懷いた多くの希望と憂慮、並びに、士卒の行動の行はれた際の精神と實際とに就ては、永久にその眞相を知り得ないのである。戰爭の當日に於ては質問に依て赤裸々なる眞理を蒐集し得るが、翌朝になれば、すでにその眞理は一定の制服をまとふに至るのである。」(7)

此れ故に、修史學の結果は、如何に事實と遠くはなれないものであつても、全く無色の記錄ではなくて、結果を見て喚起された感情の言葉に依て事件を記述せるものである。此の場合に於てツキヂデスの實例は參照に供し得る。「彼(ツキヂデス)は人々が始て干戈を取つた時に著述に着手した、」と言ふツキヂデスの記述を根據として、近代の批評家は、反證あるにも拘らず、ツキヂデスの歷史は事件と同時に作られたと認むる樣である。故に例へば「彼(ツキヂデス)は戰勝を祝するが爲に筆を取つたのではなく、彼の目的は事件を理解せしめんとするにあつた。」と主張されるのである。(8)戰爭の始めに於てツキヂデスが如何なる希望を有し如何なる目的を有してゐたかは、到底我々の知り得ない所であるが、その戰爭の實際の結果は、—或は我々は之を運命の激變、(Peripeteia)悲劇的「革命」、不幸恐怖の極點、決定的な顚例、等と言ひ得るものであるが、—ペロポンネスス戰爭の歷史に就てのアテネ人の叙述が彼等アテネ人の悲劇となることゝなつたのである。(9)「紀元前四百四年の悲劇的結末は、紀元前四百三十一年に於て兩國が始て戰爭を爲して以來起つて來た總ての事件の重要性を明にし、そして、その當時のあらゆる事實に統一的意義を與へたものである。」(10)同時代の歷史家に依つて著はされた書物は、その研究の結果と認めがたい點を有してゐるが、之は即ちその歷史家が屬してゐる所の社會全體に於ける精神の然らしむる所である。衝突の記述は或は不完全或は不正確であろう。然しこの記述はその勝敗の最後の結果如何に自己の盛衰のかゝつてゐる人々の感情をよく映し出してゐる。世人は常に、天才は外界より受ける經驗に對して極度に敏感である點に於て一般に他と區別されると言つてゐるが、大歷史

家も又國家存亡の危機に際して、その同胞の感情を正しく感じ且つこれを適當に文字に表し得る天才である。故に實際當代の「歴史は決して亡ぶることがない。」「ッキヂデスやクラレンドン（Clarendon）は不朽である。」そして、「之に反して、その時代の『標準的』歴史家の名譽ほど、たちまちにしてその聲價を失ふものはない。」(11)

修史の精神は歴史の起原の研究に依て最もよく了解することが出來るのである。英雄詩は當代の事件の記述にその端を發してゐるものである。此種の記述の完全な例は、マルドン（Maldon）の戰爭に關する英國の古詩である。アングロ・サクソン年代紀は此の古詩の歌つてゐる事件を記してゐる（紀元九百九十一年）。此年イプスウィチ（Ipswich）は掠奪された。そしてその後間もなく奉行（アルダーマン）ブリトノース（Britonoth）はマラドンに於て斬り殺さる。」此詩の性質は勿論叙事詩であつて、その全體の調子は、カア教授の有名なその中の一節のの譯文に依て之をうかゞふことが出來る。

「ビルトウォルド（Byrhtwold）は壯言して楯を握つた。——彼は老友であつた。——彼は皎々たる槍を振ひ戰ひる友がらに勇氣を示した。——」

「『我軍の勢力は衰へたけれども、思想は益々堅固となり、勇氣は益々盛んとなり、氣分は益々強くなつた。おゝ我が君は此處に斃れた、敵兵は彼を斬り殺したのである。あゝ痛恨と悲哀は、此の戰場を去つた士卒に永久に盡くることがないのである。我は年老いたれども去るを欲しない。我は我君の側らに、我が愛する人々の側らに斃れんとするのである。』」(12)

此の言葉は詩人の作に過ぎないけれども、其の當時の精神をあらはし、結局は失敗に歸したけれども、英雄的行爲を以て男子の光榮となし、族長に對する忠誠の德をあがめ、戰敗に際しても尚ほひるまぬ勇氣あることを讃へてゐる。(13)「英雄詩——これは實に或る意味に於て英雄時代其者と言ひ得るのである、——の起源は」事件後直ちに英雄の偉勳を讃美した當代の作物にあるのである。カドウィック（Chadwick）は更に次の如く言つてゐる。「英雄時代の人々の主として目的とした所は、『名譽を得んとする』にあつた。——名聲を後世に傳へんとするにあつた。」(14)而してかゝる名譽は

大膽な行爲に依て之を獲得することが出來たのである。「いやしくも名譽を博し得る者は、その戰死する前に之を博すべし、即ちこの名譽こそ勇士の獲得し得べき最上のものであつて、其人すでに亡き後であつても後世永く傳へらるべきものである。」と言ふのがベオウルフ(Beowulf)の感情であつた。英雄時代に於ては、名譽を博したる武功及び獲得された名譽は共に個人的のものであつて、從つて英雄は自己の武勇を誇り、詩人をして之を歌はしむることを喜んだのである。ヒルン(Hirn)は次の如く言つてゐる。「紀念的大事業は、總べて自負心の結果である。得意の絶頂にある英雄は、或は宮殿又はピラミッドに誇大な繪文字を記し、或は、詩人に命じて自己の武功を讃へる讃歌を作らしめて、後世の景慕者より稱讃を博し、以てその熱烈なる名譽心を滿足せしめんとするのである。故に此の場合に於ても、歴史はその心理的の意味に於て、――換言すれば現在よりも他の時代にその注意を集注する點に於て、――自負心より生じたものと言ひ得る。比較的に智的發達の程度の低い民族間に於いて、紀念的藝術が特に驚く可き發達をなしたと言ふことは、この感情的解釋に依てのみ説明せられる。而して同一の解釋は原始的な記錄の藝術的價値をも明にし得るものである。是の如き種類の歴史は、或は紀念の詩歌又は戯曲として得意自負自尊等の强い感情的要素を有してゐるからして、之を以て普通言ふ所の藝術であるとなし得るものである。」(15)

歳月の經過すると共に、嘗ては當代の英雄に關する記述であつたものも、遠い過去の行爲の記錄となるに至るのである。語り繼ぎ言ひ繼がれてゐる間に如何にその物語りの內容の變化するかは、此處に詳細に論ずる必要はない。即ち只「叙事詩は次第に歴史と離れその關係を斷つて、自ら特殊の發達を遂げるものである。」(16)と言へば充分である。實際事實は次第にその姿を沒し、殘つたものは總て古代の詩歌の有してゐた感情的の印象だけに過ぎないのである。かくて「アッチラに就て述べてゐる種々の詩に於て、永久的のもの共通的のものは、すべて彼は偉大であつたと言ふに過ぎな

い。過去の事實の中で詩人を最も强く感激せしめたものは、帝王の尊嚴に關する漠然たる傳說に過ぎないのである。」(17)故に叙事詩の中にひそんでゐる歷史の要素はワシントンやリンカアンの如き國家的英雄に對して一般人民の心裏に懷いてゐる所のものと比較さるべきものである。カア(Ker)教授は、更に次の如く言つてゐる。叙事詩を作る詩人は「過去の束縛を脫することが出來ない、即ち彼の務は彼と同一の民族に屬する偉人の物語りを作るにあるのである。」そして、「如何なる形式に於て、歷史が書かれるかは彼の關する問題ではない。只彼は何等かの形に於て國民的榮譽を彼の作品中に表はさんとするに過ぎないのである。」(18)

註

(1) H. M. Chadwick, The Heroic Age (Cambridge, 1912), P. 84 に引用した Fragmenta Historicorum Graecorum, IV, 92 の飜譯。此の物語りは紀元四四八年に關するものである。

(2) Yrjö Hirn, The Origins of Art (London 1900), P. 179

(3) W. P. Ker, Epic and Romance (London, 1897), P. 24.

(4) "History," in Greek Literature, a Series of Lectures delivered at Columbia Univercity (New york, 1912) P. 152.

(5) Works, tr. by H. W. Fowler and F. G. Fowler (Oxford, 1905), II, 110.

(6) C. L. Kingsford, English Historical Literature in Fifteenth Century (Oxford, 1913), P. 8.

(7) A Staff Officer's Scrap-Book during The Russo-Japarese War (5th impr., London, 1907), I, V.

(8) J. B. Bury, The Ancient Greek Historians (New york, 1909), P. 78.

(9) Sir R. C. Jebb, "The Speeches of Thucydides," in Hellenica: a Collection of Essays, ed. by Evelyn Abbott (London, 1880), P. 319. F. M. Cornford, Thucydides Mythistoricus (London, 1907). 參照

(10) Bury, as cited, P. 80.

(11) Mark Pattison, Essays (Oxford, 1889), I, 1.

(12) Ker, as cited, P. 63.

(13) Chadwick は上揭書九七頁に於て此詩を評して次の如く言つてゐる。「全く疑もなく此詩は戰後數年の內に作られたものであらう、或は數月以內の作なるやも知らない。」F. J. Snell は次の如く言つてゐる。「之は實にその時代の精神がしみ込んで居り、そして、英雄詩の技巧に依て飾られたる當代の歷史である。……之は單に讀者を樂しませんが爲の物語りにあらずして、國民の勇氣愛國心を喚起せしめんが爲の覺醒の喇叭である。この聲を聞いて立つ者は各地ともに少くなか

つたのである。」The Age of Alfred (London, 1912), P. 114

(14) Chadwick, as cited, PP. 87, 88, 97, 325, ff., 339.

(15) Hirn, as cited, P. 181.

(16) Ker, as cited, P. 27.

(17) Ker, as cited, P. 28.

(18) Ker, as cited, P. 28. S. H. Butcher, Aristotle's Theory of Poetry and Fine Art (3rd ed., London, 1902), P. 402 參照、即ち彼は次の如く言つてゐる。「ギリシヤの詩の大部分は信ずるに足るべき歴史であると言ふことが出來る。――即ち、それは個々の事實の正確さや個人的冒險の記錄について言ふのではなく、事件の大略を示すことや、その民族の過去の行爲に就ての理想的の形式を表示する點に於て言はれ得るのである。」

第四節

論じて此處に至る時は、アリストテレスの詩歌と歴史とに關する議論に注意せざるを得ないのである。(1) 世人の一般に記憶してゐる彼の格言は、「歴史家と詩人との區別は、一は散文で書き、他は韻語で歌ふと言ふ點に存するのではない、――假令ヘロドトスの著書を韻語にあらためても、而もそれは依然として一種の歴史たることを失はない。」と言ふのである。實に詩歌と歴史との區別は、「一は起つた儘の事件を起し、他は起り得べき一種の事件を記すると言ふ點にあるのである。」(2) 再言するならば、其の區別は「詩歌は一般的の事を述べ、歴史は特殊的の事を記さんとするのである。」此處に『特殊的』と言ふのは、アリストテレスに依れば、例へばアルキビヤデス (Alcibiades) の行つた事又は苦しんだ事を指すものであり、『一般的』と言ふのは、「或る一種の人が或る場合に於て、蓋然的法則若しくは必然的法則に從つて、如何に物語り如何に行動するか」を意味するのである。即ち、物語りの初めに當つて、或る性格を有する人物を或る地位に置く時は、他の總ての事件の發展は、此の最初の事態の自然的又は必然的の結果たらざるを得ないのである。(3)

「ギリシヤ悲劇に於ける『一般性』の要素は、アリストテレスの說く所に依れば、結局は、彼が此處に言つてゐる詩歌と歴史との區別に外ならないのである。そして此は決して悲劇にのみ獨特のものではない。アリストテレスは又此を當時の喜劇に於

ても認め得るとなしてゐる。そして此の一般性は又丁度それと同様に近代の小説――歴史小説或は寫實小説に於てさへ認め得られるのである。此等のあらゆる創律的文學の形式に於ては、人々、他の言葉で言ふならば普通所謂「人物」は、作者が各自に配當した性格の法則に從つて、行動したり物語つたりする理想的の人物である。」(4)

かくて、アリストテレスの論ずる所に依れば歴史と詩歌との相違は自ら明である様に思はれるが、然し實際に於ては此の相違は批評家の創造したものであつて、「一般的」の要素は悲劇叙事詩に於けると同様に修史學に於ても認められるのである。蓋しアリストテレスは、一方に於ては只單に戯曲家の完成された作品に就てのみ考へ、――少しも藝術家の著作中の狀態については思をいたさず、又他方に於ては、修史學に於ける人物の論述を全然無視してゐる。ギリシャの悲劇作家は「或る一定の性格を有する人物」を豫め考へて、その作に着手したのではなくて、古くより傳はつてゐる傳説(即ち歴史(5))を題材としたものであつて、その結果はすでに定つて居り、且つ一般に知られてゐるものである。「古來より神聖視された慣習に依て、悲劇作家は、多くの傳説のみをその題材とし、從つてその大略はすでに一定してゐるものである」。「傳説に於ける主要なる事實は之を無視する事は出來ない。」「物語り内部の細目は之を自由に改めることは出來る。然しその大團圓は一定してゐるのである。而して戯曲に於てその大團圓は、勢ひその劇全體の組立――事件及び人物をも支配せざるを得ないのである。」(6) これ故に、ギリシャの悲劇に於ては、物語りの大團圓が戯曲家の出發點であつて、彼はこの大團圓から段々その物語りの初めに遡るのである。作家の工夫する所は、或る一定の性格を、與へたる人物を、その物語りの最初に當つて一定の境遇に置いて、其の結果如何を示すのではなくて、或る人物が既定の大團圓に達するに當つて、その如何に合理的であつたか、又は避け難いものであつたかを示さんとするにある。――而してその經路を説くにあたつては、之を日常生活の平凡なる事件に求めないで、異常なる境遇に動かされて發揮さるゝ人間最高の可能性

を說かんとするのである。實にヘロドトスの時代より今日に至るまで、歷史家は此の詩人の著作の經路と全く同一の道をたどりつゝあるのである。即ち歷史家はその結果から見て重大事件を記述し、想像的に英雄の性格を再現して、その行爲を了解し易からしめんとするのである。スタッブスは「天才的歷史家の力量の主として發揮さるゝのは、大人格を充分に理解し得るや否やにある。」(7)と言ひ、更に最近の論者は、「記述された歷史の唯一の特殊の領域は個人の性格とその影響を取り扱ふ點にある。」(8)と言つてゐる。それ故に、この重要な事項に於て、修史學は他の想像的文學即ち詩歌等と區別することが出來ないのである。(9)

「政治社會の歷史は叙事詩、戲曲又は小說に類似せるものである、即ち此等のものは何れも人事の盛衰の繼續を物語るものであるからである。」(10)

「歷史家の任務は此點に於て戲曲家又は小說家の任務と異ることがない。歷史家も又彼等と同じく、人物の役割りを定め、事件の場面を組合せて大團圓に向つてその事件の進行を促し、次第に興味を深くし、讀者をして少しも倦怠せしめない樣にしなければならない。」(11)

アリストテレスが歷史を以て年代記と見なした事は、修史學にとつては大なる不利益を來した。「アリストテレスの見解に依れば、歷史は年代記である、即ち事件の發生した場所が大變離れてゐり又事件と事件との間に何等の關係が存在しなくとも、歲月の經過に從つて多くの事件を記錄するものである。」(12)之に反して、詩的物語りに於ては、各部分の統一があり論理的聯絡がなければならない、即ち物語りの筋は始め、中、終りの三部をそなへてゐる一つの完全なものでなければならない。かくて、アリストテレスの見解に依れば、「詩歌は其の題目が高尙であり、又各部分の間に密接な且つ組織的な聯絡があるからして、歷史の決して有することの出來ない理想的の統一を有するものである。」(13)然し此處に比較しようとする此の兩者は同じ標準に立つてゐるものではない。アリストテレスは叙事詩と年代記を比較したけれども、叙事詩とは、非常に發達した歷史的藝術の

一形式であつて、これに於ては過去の行爲に依て喚起された感情が實際の事實から離れて働へて居り、又年代記とは歴史の骨骼に過ぎないのであつて、而も此の骸骨は筋肉を有せず生命をも缺いてゐるからして眞の歴史と言ふことは出來ないのである。

アリストテレスに依て提出された此樣な比較は極端の場合を指すものである。而して修史學は確にアリストテレスが非と見なしたヘロドトスやツキヂデスの著書を模範としてゐるからして、(14)アリストテレスが論じた樣な議論はもはや維持されなくなつたのである。修史學に於ては年代記と異り、第一に注意すべき事は、――悲劇と同じ樣に――「筋」である。そして總て歴史家の當面の問題は、多種多樣な材料を如何にして統一の範圍内に於て自分の思ふまゝに使用するかにある。

「戲曲の筋は、……相互に組織的の關係あり且つ原因結果の法則に依て支配さるゝ幾多の聯絡を有する事件である。内部の中心即ち全體の事件が之を中心として回轉する樞軸は脚色である。」(15)

修史學に於ける統一は、重要なる點に於て、悲劇に於ける統一と異るのである。而してアリストテレス(四章十節)が、悲劇は叙事詩に次で起つたと述べてゐるが故に、此點は益々注意すべきものである。古代の英雄詩に於ては、單に英雄一個人の行爲を歌つてゐるものであるからして、その筋は頗る簡單である。然しながらホーマーの叙事詩に於ては、記述の範圍は非常に擴大せられた。「ホーマーの詩の大なる範圍の中に表れて來る人々の物語り及び行爲は、人類が單にその一部分をなすに過ぎない更に大なる運動に關係があるのである。特殊の筋は、それ以外の大なる自然の力に依て動かされてゐるのである。主人公である英雄も、要するに事件の大勢に動かさるゝに過ぎないのである。叙事詩中に表れてくる危機一髪の間に生命を全ふする事件、恐愕すべき事件、其他の種々なる部分的事件又は不可思議なる事件は、要するに幾分かは主人公である英雄の有する自然の勢力に依て生じて來るものである。」一言にして言ふならば、「叙事詩は一民族の興亡又は人類の盛衰と密接

な關係ある重大な且つ完結してゐる筋を物語るものである。」之に反して悲劇は、「一個人の運命を示すものである。」悲劇に於ては、「外界の事情が個人の精神の力を全く支配することは極めて稀である。」(16) 故に、叙事詩に次で起つた悲劇は、個人の運命が團體の盛衰に依て左右さる樣に思はれるその注意すべき意見と甚だしく相異するものではない。アリストテレスの論旨は、叙事詩と悲劇との間に於ける題目の表面的の繼續に就いてあてはまるものである。――アテネの悲劇は正に叙事詩を利用したものであつた。――然しアリストテレスはヘロドトスがホーマーの廣い觀察に倣つて、その著作に着手したにも拘らず、叙事詩と修史學との間にその取題に聯絡あることを注意しなかつたのである。

ペルシャ戰役の後に起つた驚く可き創作界の盛時に於て、同樣に叙事詩を基礎としてゐる戲曲と歷史とは、完然に各々その特徴を發揮するに至り、かくて我々は、すでにポリビウス (Polybius) (二章五十六節) の言つてゐる樣に、此の兩者は「相互に全然相反する」文學上の作品と認むる樣になつたのである。悲劇はその初めに於てさへも、「人間の精神を以て、總ての戲曲の本體としなければならないと言ふ見地」に立つてゐた。戲曲家の興味は個人の間に共通である運命にあつた。そこで彼は個々の人間の精神が運命の織り出した難關と奮鬪する經路を說くのである。歷史は、全く之と精神を異にして、その代表的人物の活動に依て團體を說明せんとするものである。戲曲家はあらゆる人間に對してその筆を執るが、歷史家は自分の時代自分の國の人々に對して筆を執るのである。戲曲家は感情的に所謂劇中の「人物」と同化するけれども、歷史家は特殊の一國民と同化するものである。我々、聽者は、劇に於ては一身の上に起り得べき事を認め、歷史に於ては自身の國に起り得べき事を認めるのである。何れの場合に於ても「教訓」として之を說くのではなくて、單に結果――その利、不利は問はない――と手段――その善、惡及び意志に反する手段又は意志のまゝの手段を問題としない、――とを明瞭に正確に抽寫するに

過ぎないのである。

歴史の取り扱ふ所のものは個人の運命ではなくて、國民の興亡である。然しながら、團體の盛衰はそれを代表する有名な人物の行爲に於て觀取されるからして、歴史家は明に曠般な觀察力を失ひ、戯曲の傳統的流儀におち入るの傾向がある。この傾向は古代の修史學に於ては甚だしいのであるが、これは全く叙事詩より傳承して來た慣例に依るものである、かくて古代に於ては歴史的人物をして想像的の演説をなさしめてゐる。然しながら近代の歴史家がツキヂデス、タキタス（兩者とも戯曲家的態度が明に表れてゐる）を稱賛して、絶へず「性格抽寫」を强調し、歴史小説に沒頭することは、ヘロドトスの藝術が之に相對抗するアイスキロス（Aeschylus）ソフォクレス（Sophocles）の藝術より常に受けてゐる危險を示すものである。

註

（1）S. H. Butcher, Aristotle's Theory of Poetry and Fine Art (3rd ed., London, 1902), 及び Ingram Bywater, Aristotle on the Art of Poetry (Oxford, 1909) を見よ。我々は幸にも此等の版で二樣の相異る同等に立派な批評を見ることが出來るのである。

（2）Poetics, IX, 2, tr, Bywater, P. 27; Butcher, P. 35 參照

（3）Bywater, as cited, PP. 187-88.

（4）Bywater, as cited, P. 189.

（5）「アリストテレスは自身神話を歴史と呼んでゐる。」Butcher, P. 402.

（6）Butcher, as cited, PP. 356-57.

（7）William Stubbs, Seventeen Lectures (Oxford, 1887), P. 112. Theodore Watts-Dunton, "Poetry," in Encycopaedia, Britannica, 9th ed., XIX, 280. 參照。彼は「藝術家の思想力は主として直接に理想を説明せんとする點ではなく、動機を觀破するの點に於て示さるゝものである。」と言つてゐる。

（8）W. M. F. Petrie, "Archaeological Evidence," in Lectures on the Method of Science, ed, by T. B. Strong (Oxford, 1906), P. 230.

（9）先に述べた論旨を充分に理解せしむる爲に English Historical Review の最近の卷（二十九卷）から手當り次第に次の如き記事を拔萃してこゝに追加して置く。「著書の英雄的人物の評論を良いと思ふ。……その元帥の性格の解剖に至つては正確にして興味あるものである。」（H. W. C. Davis, PP. 145, 146）。「William 氏は始てその英雄に對して信用し得べき且つ適確な描寫を試みたものである。……一個の人間と

して又は政治家としてChathamの性格を論ずるWilliam氏の評論は充分滿足し得べきものである。」(W. L. Grant, P. 380). 「本書に於て遺憾に堪へないことは、人物の判斷の當を失することである。Vickers氏は何人も主人公とする考を有しなかつた如く、書中に表れて來る各大人物に對して殆ど總て酷評を下してゐるのは、讀者をして不快な感情をいだかしむるものである。これは國王及び王族等を論ずる場合に特に著しいものである。」(C. L. Kingsford, P. 555.)

(10) Sir G. C. Lawis, A Treatise on the Methods of Observation and Reasoning in Politics (London, 1852), I, 120.

(11) Louis Bourdeaw, L'histoire et les historiens (paris, 1888), P. 205.

(12) Bywater, as cited, P. 187. 又同書三〇六頁を參照せよ。

(13) Butcher, as cited, P. 185.

(14) Bywater の考に依れば、(三〇五頁) Poetics XXIII, 1,1459a21 には修正が加へられなければならない。即ち普通の讀み方に從へば、「充分その任務を盡さうとする場合の歷史家のやり方には、幾分悲劇や叙事詩のやり方に似てゐるものがあるが、普通一般の歷史は悲劇及び叙事詩とは同樣なものでないとの意を彼(アリストテレス)は述べてゐる、」からである。自分は全く「かくの如き不合理な意見」を首肯しようとはしないのである。故にBywaterの提出した此の美しい修正でさへ、アリストテレスがEphorusの歷史に於いて表れてゐる樣な傾向に同情しなかつたと言ふ所信を動搖せしむるものではない。

(15) Butcher, as cited, P. 348.

(16) Butcher, as cited, P. 353.

第五節

修史學上に於ける特殊の「筋」は、相異なれる各團體、各社會、各國民の間の存亡を賭する戰爭を示すものである。かくて人類が常に之を記憶しようと欲する歷史は、決死的の戰爭の結果として表はされたのである。この特色は、散文の修史の始めヘロドトスに於て充分發達した樣である。「歷史の父」の著述は、その始めは、單にペルシャ入寇の物語りよりなつてゐた、今日此はヘロドトスの著作の最後の三編をなしてゐるものである。(1) かくの如くヘロドトスは彼にとつては全く近代史であつた所の單純な戰爭の物語りを以てその著作に著手してゐるのである。これはその筋が簡單で、古來より言ひ傳へられた英雄的精神より思ひ付いた物語りであり、又衆寡敵しがたい强敵に對して博し

得たる勝利の物語りである。これはアテネの國威を發揮しアテネ人の誇りを過褒した物語りである。ヘロドトスは「ギリシャの眞の救主」としてアテネ人を描いてゐる。然し「彼（ヘロドトス）の爲した所は此のみではない、彼はアテネの傳說を示し、アテネ帝國の存在の理由を明にし得る物語りを流布せしめ、更に之に權威を與へてゐるのである。」ベリー（Bury）は言つてゐる、「アテネ人がヘロドトスの著作の功績を認めて、彼に十タレントの賞金を與へたと言ふ傳說が眞實であるならば、彼が彼等の都市の名譽の爲に盡した功績に對しては極めて瑣々たる報酬であつた。」(2)

晩年に至つてヘロドトスは戰爭に對する新しい見識を得て、之を以て種々の相異れる事件の綜合せる結果であると認むるに至つた。そしてこの新しい見識に依て書かれた彼の晩年の歷史が人類の不朽の賞讃を博してゐるものである。近代に於ては、ヘロドトスの極めて巧みなる文藝上の技倆に對する尊重は、彼の研究した問題に對する學者の興味に依て陰蔽さるゝ恐れがある。實に、ヘロドトスは、古代史の研究者にとつても價値を有する者であり、又史的考證の發達を研究する者にとつても價値を有し、更に、文學としての修史事業の發達を研究する歷史家にとつても價値を有するものである。マカン（Macan）は次の如く言つてゐる。「ギリシャ文學、否ヨーロッパ文學に於て、最も優れたる物語りを著はしたることは注意すべき必要がある。ギリシャの著作家は、何人もヘロドトスの如く、廣く世界全般に渡り、現在過去の無數の男女に就て記述した者はない。（ヘロドトスの私淑したホーマーと雖も到底之には及ばないのである。）ヘロドトスの著作はイリヤッドとオデッセイを合せて散文で示したものの樣であつて、挿話は豐富であり興味深く、而もこの口碑に傳はる叙事詩即ちイリヤッド、オデッセイよりも題目の統一性を充分供へてゐるものである。」(3) この批評は古來多くの男女が如何なる問題に興味を有してゐたかを示すに足るものであるが、然しヘロドトスの著作が歷史として大なる價値を有する理由に觸れてゐるものではない。ヘロドトスの著作が史籍

中の傑作と認めらるゝ理由は、全體の記事に統一を與へてゐる廣い觀察力がある爲である。(4) 此の觀察力は之を利用して觀察することが出來た感情と區別し難いものである。ペルシャ人がその目的を達して、敗北せずに退却したや否や、或はペルシャ人擊退の名譽はスパルタ軍に歸すべきや否やは、この關係に於て重要なことではなく、要點はペルシャ戰爭の結果としてアテネが改造され精神的に復活した事である。ヘロドトスの著作の最初のものは、單なるアテネ人として當然懷くべき虛榮心を表現したものに過ぎないものであるが、之に反してその修正增補した完本は、只單に戰勝に對する誇りを示してゐるばかりではなく、尙又極めて重要なる意義を有することは、戰勝に依て生じたる功名心を示してゐることである。――この戰勝に依る感激に依てアテネ人は一時は何を企てゝも成功しないものはないと夢想するに至り、そしてこの夢想の結果アテネは遂に敗北し、アレキサンダーに征服さるるに至つたのである。

ヘロドトスの著作は、最近の事件の詳細を記述し、その序文としてその事件を生ずるに至つた事情を說明した歷史の典型である。かゝる史籍に於ては、その中心をなすものは、著者の適當と認めた大團圓であつて、それ故にその物語りの統一は結果に依て生じて來るものである。更に又、此種の史籍の特徵とさるべきものは、事件が決定的の意義を有するものであると認めらるゝ程度に從つて、目前の結果を以て將來を決定するものであると見なす大なる傾向を有することである。ポリビウス(Polybius)の此の種の史籍に就ての十分に自覺ある說明は、興味ある一例である。

彼は次の如く言つてゐる、「此時代以前に於ては、世界史上の事件は何れも、孤立の狀態に於て起つたと言ふことが出來る。蓋し何れの事件も、その發端に於ても、その發展に於ても、時間的にも空間的にも、他の總ての事件と全く關係を有しないからである。然るに此の時代より以後に於ては、歷史は組織的の一體をなし、そしてイタリー及びリビヤの事件もアジヤ及びギリシヤの事件と關係を有し、事件の大體の潮流が或る一定の點に向つて集中する勢を有することが認めらるる。」彼は更に語を續けて次の如く言つてゐる。「我々の著書の明なる特徵は、吾人の時代の驚く可き特徵に從つて定るものである。何となれば天

運は世界の殆ど全部の事件を一の中心點に向はしめ、あらゆる歴史上の勢力を驅て同一の方向に向はしめたからして、我々は吾人の歴史を以て、天運の力に依て全世界の組織完成の爲に一起一倒せる總ての事件を一の統一的見地の下に讀者に對して說明せんと欲するのである。實に我輩をして歴史の編纂を思ひ起さしめ、遂に之を實行せしむるに至らしめたものは、何事よりも先づ此れが爲である。」(5)

ローマの世界征服の題目はポリビウスの史籍に統一を與へた。而して之と同時にローマ共和國の遠大なる成功は彼をしてローマの遠き將來を豫想せしむるに至つた。何となれば、「此の世界に存する總ての人々はローマ人に服從し、ローマ人の命令を奉ぜざるを得ないことは、あらゆる人々の確信する所であり、之を信ぜざらんとするも又あたはざるものである。」と彼は言つてゐる。(三章四節)故に、ローマの戰勝が歴史に統一を與へたと言ふ思想は、フリーマン(Freeman)教授の著書に先だつこと、千有餘年の昔すでに存在したのである。

然しながら、ローマの權力擴張はポリビウスをして世界史を著はさしめたるより、更に大なる影響を修史學に及ぼしてゐる。實に歴史の第二の典型、即ち一國民の過去を一の統一ある事件として認むる思想は、ローマの歴史上に及ぼした影響と言はなければならない。上古の文學史上に於て、此の第二の種類の歴史の模範とすべきものは、リビウスの歴史である。而して此の種の歴史は、第十九世紀の間盛んに各國に於て研究せられたが爲に、(6)如何にも歴史本來の典型の如く思はれるが、其の盛んに行はるゝに至つたのは極めて近代の事であつて、中古の時代に於ては全然閑却されてゐたのであつた。

ヘロドトスに於ては、その記述する總ての事件は、ペルシヤ軍入寇の危機に歸着するものである。而して此事件に先つて起つた種々の出來事は彼の記述する戲曲の「筋」の中に入るべきものであつて、舞臺に於ける人物を構成し、「紛糾」を生ずる要素である。リビウスも又一國民の危機に對して、興味を帶びるのであるが、その興味は全くヘロドトスと異るものであつた。著者(リビウス)は單に

一戰爭の結果のみを述べんとするのではなく、從つて其の著書には戯曲的大團圓は存することがないのである。要するにリビウスの著書に於ける危機は、「未解決」のまゝであると言ふべきであつて、これはその著書に描寫されずして、寧ろリビウス並に讀者の心裏に存するものである。リウビスの注意はローマ人の內政史に集中され、彼は高所に立つて、ローマ人の爲し遂げた幾多の事業を回想し、そしてローマ人が敬虔と不撓不屈と紀律とに依て、一歩一歩勝利を博したることを認めた。然しながらリビウスはその著書に於て、ローマの益々大なる勝利の記事を絕へず紙上に表はしてゐるけれども、彼の本當の精神は、單に戰爭を自負せんとするものではなく、實に誇りであつた。ローマ人の强固なる地位を獲得した誇りと、優越なるを自覺したその誇りであつた。リビウスの誇りは熟考の結果である。而してそれは先代の功績をあがめ、現代の墮落をなげくものであつて、——非望を懷くの甚だしきには至らないが、——將來に對して實際的の豫想を試みるものである。かくて彼はその史籍の有名なる序文の中に次の如く述べてゐる。

「予が多くの讀者に向つてその熱心なる注意を求めんとする問題は、次の點である、——即ちそれは我が社會の生命と道德とである。之に依て內政に、はた外戰に勝利を博し、領土を擴張したる人物と性格とである。道德の標準の漸次低下すると共に國民性も次第に墮落し、最初は單に徐々としてその低下するを見るに過ぎないが、次に益々その墮落の速度を加へ、結局は現在の如き甚だしき破滅を見るに至るのである。實に今日に於て、我々は國家の病疾又はその救濟手段を考へ得ざるものである。」

此のリビウスの言葉は無論一の美辭に過ぎないけれども、而も著者が七百年間の詳細なる事實を巧に論述するに當つて、如何なる思想を懷いてゐたかを伺ひ知るに足るものである。（未完）

註

(1) Herodotus, IV-VI, ed. by R. W. Macan (London, 1895), I,xcii.

(2) J. B. Bury. The Ancient Greek Historians (New york, 1909), PP. 62, 65.

(3) Macan, as cited, I, lxxiii, 及び cxvii-viii 參照。

(4)「然しペルシヤ人が入寇し來つて、そして、敗れて歸るや、優良なる材料が藝術家に提供された。マラソン及びサラミスの勝利が國民の自尊心をあほつた。唯それに言及したものに成功を保證したのみならず、渾沌たる事件を順序づける容易なる手段を提供した。…只勝利民族の虚榮心のみエヂプト征服やスキタイ遠征等の大事業を、このギリシヤの最爾たる半島に接近する階梯と見ることが出來た。」Henri Ouvré, Les formes littéraires de la pensée grecque (paris, 1900), PP. 307-8.

(5) Polybius, i, 3, 4; tr. by J. L, Strachan-Davidson.

(6) 歴史家の「事業は寧ろ一國民及び一時代の發展を示し、且つ正確に之を記し、その特徴を示してゐる幾多の事件を、其國民又は時代の精神に照して正確に記述するものゝ樣である。」Viscount Haldane, the Meaning of Truth in History (London, 1914), P. 10.

英國の地名の發音について

今宮　新

英語の發音が六かしいのには誰しも閉口する所である、殊に我等に必要なるその地名人名に於て一層然りである。私の滯英中(一九二六年)ザックバランに使はれてゐる發音の統一を圖るため、丁度ラヂオで第一回の放送があり、今後大に之が利用さるべきだと思つてゐたが、ロンドンタイムズ週刊一九三〇年八月二十八日號には英語の地名の標準發音について約千五百語ばかりを編纂した小册子が發行せられたことを報じてゐる。

之は勿論イギリスの放送局自身のアナウンサーの用に宛つるため、一の試みとして作られたもので、諸方面の異論もないではないであらうが、今日新聞或はラヂオの用語が普遍性を有する(例へばアナウンサー松内氏のベースボールの放送は小學生の發音までも支配してゐると傳へられる)のであるから、本邦で大に誤讀せられてゐる英語の固有名詞の發音を正すのに幾分役立つであらうと思つて、同誌からの見本を左に掲げる。

△標準的のもの Grundisburgh (Suffolk) グランヅバロー、Happisburgh (Norfolk) ハーズバロー、Sedbergh (Yorkshire) の町はセ